



会報

平成28年度
会報第2号

発行・編集

鹿児島県教頭会

〒892-0836

鹿児島市錦江町2-16

鹿児島県公立小・中学校

教頭会会館県教頭会事務局

TEL 099-226-8268

FAX 099-822-5580

平成二十八年度を振り返って

鹿児島市立南中学校
副会長 木場敏朗

八月に行われたリオデジャネイロ五輪では、過去最高となる四十一個のメダルを獲得した日本人選手の活躍に、会員の皆様も胸を躍らせたことと思います。

次の東京五輪や同じ年に開催される鹿児島国体では、今、まさに私たちが日々向き合っている児童生徒の中から活躍する選手が出てくるかもしれません。とても楽しみなことです。

反面、本年度は危機管理について改めて考えさせられる年でもありました。

四月に発生した熊本大地震では、熊本県や大分県で大きな被害が発生し、被災地では、多くの学校で長期にわたり、正常な教育活動が行えない状況になりま

した。それらの学校では避難所の運営に管理職をはじめ多くの職員が関わり、地域の皆さんから感謝される一方で、教育の場としての学校の復旧までには大変な御苦労があったと伺っています。

学校は、地震に対する対策をはじめ、津波や風水害などの自然災害への対策、防火対策、不審者対策、学校内外での児童生徒の安全確保、職員の心身の健康管理や信用失墜行為の防止対策など数えきれないほどの『危機』に対する適切な対策と対応が求められていることを再確認した一年となりました。

さて、平成二十八年度の第十回全国統一研究大会では、第十期全国統一研究主題「豊かな人間性と創造性を育む学校教育」の三年目(最終年度)の研究大会でした。

一日目の講演では、文部科学省の澤田浩一先生による御講演をいただき、学習指導要領改訂の背景や道徳教育の課題、特別の教科として何がどのように変わっていくのか等について示唆に富んだ講演を聞くことができました。

二日目は、五課題七分科会に分かれ、各地区で地道に且つ着実に積み上げてこられた実践をもとに熱心な協議が行われました。

今期の三年間の研究を通して得られた成果と課題を来年度から始まる次の研究主題「豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育」のもとでの研究・実践に繋げていくことが、私たち教頭の職務における専門性や様々な課題への対応力を高めることにつながると思います。

新年度から第十一期が始まります。新しい組織や研究体制への移行がスムーズにいきますよう、会員の皆様の御支援や御協力をよろしくお願い申し上げます。

教育現場では、新学習指導要領の実施が間近に迫り、情報化やグローバル化などの社会の変化に主体的・能動的に対応できる児童生徒の育成へ向けた更なる取組が求められています。

そのためには、私たち教頭が、今まで以上に積極的に情報を収

集し、お互いに情報共有を図ることで、それぞれの学校の教育活動の充実につなげていく必要があると思います。

最後になりましたが、公務御多用の中、御指導・御助言並び

新任 教頭 雑感

南さつま市立小湊小学校

西田靖子

四月、新任教頭として南さつま市立小湊小学校に赴任した。不安な気持ちで到着した学校は、青々とした芝生の校庭に色とりどりのきれいな花々。二階建ての木造校舎。そして、ピカピカ光り輝く廊下。そんな学校の様子が「よっこそ、小湊小学校へ」と、私を歓迎してくれているようで、不安が一気にやる気変わったことを覚えている。

本校は、吹上浜の最南端に位置し、北は白砂青松、南は長屋山に連なる緑に囲まれた風光明媚で自然豊かな校区の中心にある。全校児童二十五名、教職員十二名の極小規模校である。この極小規模校を支えてくださっているのが校区自治会や小湊活性化グループ、仲よしクラブ、校区体育協会、チャレンジ教室、伝統芸

に御協力を賜りました県教育委員会をはじめ、各市町村教育委員会、連合校長協会、関係諸機関の方々には会員一同心からお礼を申し上げます。

能保存会といった地域の方々である。「なんでん、でくっことはすっから」「教頭さんが困ったときは力になつて」と、気さくに鹿児島弁で語りかけてくださる。伝統芸能の鎌 hands 踊りや加世田スポーツ祭、加世田地区駅伝大会の練習には、仕事が終わった後に駆けつけて子どもたちに熱心に指導をし、土曜授業では、砂像教室やスケット大会、灯ろう作り、グラウンドゴルフ、昔遊びなど子どもたちと一緒に活動して下さる。学校が地域とつながり、たくさんの方の協力をいただいていることをこの十か月で痛感した。「昔は七百人いたて」と二十五名の子どもたちを見て、地域の方が寂しそうに言われるのをよく耳にする。でも、地域や本校の魅力は脈々と受け継がれている。今後も地域の方々と共に元気のある魅力ある学校づくりを推進していきたい。

屋久島町立永田小学校

牧野 剛志

感動そして感謝

本校は、世界遺産に登録されている屋久島の西部に位置し、うみがめの産卵で有名ないか浜や永田岳を間近に、夜には満天の星空が広がる自然に恵まれた学校である。全校児童は、二十七名。完全複式の小規模校である。

今年度、本校は創立百四十周年及び山海留学制度である「かめんこ留学」二十周年の年であった。学校ではこの記念の年を盛り上げるべく、創立百四十周年の横断幕を職員で製作し、かめんこ二十周年の横断幕は地域の建設会社にボランティア製作依頼をした。

また、運動会を一大イベントとして、かめんこ留學生のOB・OGを招くこと、三百個の風船を大空へ飛ばすことを決めて、学校と地域が一丸となつて取り組んだ。

これまで、全国各地から二百名ほどの留學生を受け入れてきたが、当日は、遠路はるばる二十名ほどの参加があり、盛大に開催することができた。中でも、一期生の方に、お子様連れの家族で参加いただいたこと

は、二十年の時の流れを感じると共に非常に嬉しい瞬間であった。

教頭になって十か月。まだまだ動きはぎこちないが、校長先生をはじめとする先生方、保護者や地域の方々を支えられて職務を遂行することができている。また、島内の教頭先生方の御指導や協力態勢にも感謝している。ここで出会えた方々とのつながりを今後も大切に、児童・学校・地域のために一杯職責を果たしたいと思う。

いなか浜で生まれ、大海原を旅し、大きく成長して帰ってくるうみがめのように、ふるさとを愛し、たくましく育つ子どもたちの成長を願って。



随想

「不易と流行」

鹿兒島市立牟礼岡小学校
末吉 生枝

昨年末に十三年乗っていた車

を買換えた。この十三年の間、車の機能は大幅に進化して驚いた。まず、スイッチでエンジンがかかる。方向音痴の自分にとってほしかったナビは、電話がかかると対応できるし、バックモニターにもなる。道路のラインを超えると「居眠りしてませんか」とばかりに警告音が鳴るし、少し暗くなるとライトがつく。これらの機能をしつかり使いこなせるのか不安になるほど様々な便利な工夫がついている。

例えば、自分が初任のころ、「鉄筆」で週報を作りガリ版で印刷したこともあった。それから、印刷機も進化し、今やパソコンからプリンターへすぐに何枚でも印刷できる。ワープロを

使って大事にフロッピーに保存していたのがはるか昔のように感じる。

長年使っていた携帯電話をスマートフォンに換えてみると、検索や情報収集、カメラ機能と大いに役立っている。

今の子どもたちは、この便利な時代が当たり前。すぐに新しい機能を使いこなせる。しかし、だからこそ、コミュニケーション能力の育成が必要になっている。

学級崩壊請負人として活躍されている菊池省三先生は、相手の話を「聞く」態度を育てることで「話す」能力も育つと話している。自分を表現することは自分を認めて存在を確立することにつながる。そういう子どもを育てることは、便利な現代こそ必要な変わらない教育だとつくづく思う。

I ♥ TOKUNOSHIMA

徳之島町立花徳小学校

富林 弘

国の特別天然記念物アマミノクロウサギ二匹の死骸が十六日

までに、徳之島町の県道二か所で相次いで見つかった。二匹とも交通事故に遭ったとみられる。二〇一三年以降で最多。環境省徳之島自然保護官事務所は「県、町と連携して事故防止対策を講じたい」と述べ、ドライバーへの注意を呼び掛けた。

(H28年11月27日南海日日新聞)

現在、環境省と林野庁では、奄美大島と我が徳之島を「世界自然遺産登録候補地」としての取組がなされている。しかし、新聞記事にあるように意図的ではないにしろ悲しい現状にある。

先日、遠足で徳之島の山中で捕獲され野生化した猫(ノネコ)を飼育して、新しい飼い主を探すための拠点施設「ニャンダーランド」を児童と共に見学した。担当者の説明や配付資料によると、狩猟用やペットとして飼われていた犬や猫が捨てられ野生化し、奄美本島と徳之島にしかない「固有種」のアマミノクロウサギの生存をおびやかす存在になっているとのことであった。

島の子どもたちは、島への想いや願いを胸に秘めながらいずれ島を離れ都会へ旅立つ。

本町の各学校では、環境教育や郷土学習の時間と地域の子ども会活動等で(アマミノクロウ

ウサギ保護看板設置、夜光貝の稚貝放流、校区内海岸清掃、ウミガメ産卵観察等）様々な環境保護活動を行っている。これらの活動をとおして、郷土の自然に自らの五感を

とおして触れ、体験し、自然保護への意識の向上と郷土のすばらしさに気づく子ども、さらに郷土を愛し、島のために尽力する子どもへと成長してもらいたい。

私の勧める一冊の本



「世界が憧れた日本人の生き方」
日本を見初めた
外国人36人の言葉

著者 天野 瀬 捺
発行所 ディスカヴァー・
トゥエンティワン
日置市立美山小学校
西別府 龍一

子どもたちには、本を読めと言いが、自分自身、本は買うことが読まずにためてしまうことが多い。また、いろんなジャンルに手を伸ばしたいが、いざ本屋の書棚の前に立つと、手に取る本は、どうしてもビジネス書に偏ってしまふ。しかしそれはそ

れで、今自分が欲している心の栄養なのではないかと割り切っ
てしまっている。そして「教頭
としてもっと効率的に仕事を
進めればいいのだからが、いつ
もバタバタとして、じつくり腰
を据えて本と向き合う時間を
持てない。」などと言いつつ
拭しようとする取ったのがこの
本である。

「シーボルト、アインシュタインなど、歴史に名を残す世界各国の偉人たちが感動のあまり書き留めた言葉の数々から日本人の立ち返るべき原点が見えてくる。」という言葉に引かれこの本を手にとった。その中のヘンリー・ダイアーの「教育で人格を養う」という一節が特に心に残った。「日本のサムライは、ずいぶんと高度な教育を受

けてきた。これは、この国の武家階級のみならず、ほかのすべての階層に属する者にもかなりの程度まで当てはまることである。だがその教育は、ただ試験に合格するとか金儲けに役立つといったことを目的としたものではなく、人格を陶冶することにあった。」日本の伝統が外国人から見ると、いかに新鮮で美しく見えたか。たくさん外国の偉人の言葉から「日本文化の奥深さ」を再確認させられた。同時に、教育の場にたずさわる者として生かせることもたくさんあると感じた一冊であった。

やはり、ビジネス書は良い。ちよつとした時間で、様々な気付きと刺激を受けることができる。今年一年、本からもたくさん栄養を吸収し、研鑽を積んでいこうと思う。



「学力」の経済学

著者 中室 牧子
発行所 ディスカヴァー・
トゥエンティワン
曾於市立財部南小学校
坂元 弘平

エビデンスのある指導法

小学校時代やらされた漢字の練習方法で最も多かったのは「日百字」だった。

宿題を忘れると百字を累積させる教師もいた。宿題嫌いな男子など数百字どころか千字を超える蓄積があり、その後どうなったのかと他人事ながら気になる。

指導には三種類ある。
一 効果のある指導
二 可も不可もない指導
三 逆に悪くさせる指導

この体力主義的指導はどれだったのか？有効だとしたらどのくらい有効だったのか？教師の世界で三十年以上過ごしてきて「その指導が有効かどうか」「有効といえる根拠は何か」を論議している場面に遭遇したことがほとんどない。

医者には病気を治す治療をしてほしい。病気が悪化する治療など言語道断だ。ゆえに医者

は学会で検証された有効な治療法を学んでくる。

この本の表紙カバーには「その教育、本当に効果があるのか？」と記されている。この本の主張は「教育に科学的根拠を！」である。科学的根拠をエビデンスという。

科学的根拠までいかなくても多くの教師によって「この方法は効果があった」という指導法を勉強し、身に付け、実践すべきだ。不勉強ゆえの自己流な子どもに対する不誠実なものである。

子どもに教える教師の最も大なる信用失墜行為は「教え方が下手」やればやるほど子どもが勉強嫌いになること」だと考えている。それにより通常の子どもは自信をなくし、発達障害の子どもは二次障害を起こす。エビデンスのある指導法を学び、少ない労力でも確かな効果のある実践をすることは、世界一多忙でストレスフルな日本の教師にとっても、将来の日本を背負う子どもたちにとっても幸せなことであるはずだ。



自由投稿

遡源！

仁の国「ニッポン」

鹿児島市立武岡中学校

中村洋一

「公と私」どちらが大事か。古来、日本は儒教の精神から「公 \searrow 私」の国だった。主人のために、藩のために、お国のために「切腹」さえする。しかも、世間もそれを当然とする国だった。武士だけではない。巷には「江戸しぐさ」という暗黙の掟があり「他者のために」が力なくごく自然に実践されていた。ところが、浦賀にペリーが来てちと変わり、マッカーサーが来て、大きく変化した。彼らの意図を完全に消化しきれなかった結果「公 \wedge 私」となつて「個」が蔓延りすぎたのではないかと思う。個人主義、個性重視、個人情報等、漢字の力に騙されたのではないかと個人的には思う。つまり、個と「自分勝手」を履き違えた人が増え

てしまったのである。

昔の「公 \searrow 私」の時代の方が今の「公 \wedge 私」よりも「私」を大切にしていたのではないかと、う気さえる。その証拠に、人の迷惑を考えない、自分だけよければいいと考える人は、圧倒的に昔より増えている。電車の中など、つまり、公の場で私的なことをする人が増えているということ。携帯、おしゃべり、座席の独占、女性に対する失礼な行為など、人の「私」を犯す行為が蔓延ってしまった。

日本の将来を担う人材育成を託されている学校。他者に嫌な思いをさせない、他者に優しい日本を復活させるためにも道徳の原点に遡り、「公」に視点を置いた教育の在り方を再考すべき岐路に立たされていると強く感じている。



「日常の中から

学ぶこと」

出水市立上場小学校

白田実

本校は、全校児童十三名。豊かな自然に囲まれた小さな学校である。冬には、一面の雪景色。鹿や猪に出会うこともある。夏は、ホタルも飛び交っている。

一方で、自然の厳しさを体感する場面もたくさんある。一昨年は、子どもたちが大切に育てていたサツマイモは猪に全部食べられてしまった。また、長靴が役に立たないくらい深い雪が降ってドアが開かなくなった。校庭の水道が凍って水道管に亀裂が入り、噴水みたいに なったりもした。でも、そんな事態に遭遇しても、何か笑いがこみ上げてきてしまう。

昨年はサツマイモを、食べられないように柵を立て、十分な量を収穫することができた。

雪が降った時には、出入り口には薬剤を撒いて雪が積もらないようにすることも学んだ。

天気予報をしっかりとチェックして寒さが厳しくなりそうない日は、少しでも蛇口を開き、凍結の被害も最小限に留めることができた。地域や保護者の方々、子どもたちや先生方からも教えてもらいながら、自分が知らなかったことを知り、少しずつでもいろいろなことが分かってくる日々は、とても充実感に満ちあふれている。

こんな毎日を送っていると「学ぶ」場面は、何気ない日常の中にたくさんあるのだと気付かされる。前向きに学ぼうとする姿勢を忘れず、これからも地域の方々や子どもたちのために貢献することができるよう努めていきたい。

